

剣の道を通して

成長の喜びをともに味わう

毛呂山中学校剣道部外部指導員



神尾あきのさん

はにかむ笑顔からは想像がつかないが、神尾さんは剣道の有段者。父親が剣道の先生、母親も姉も剣道に親しみ、「もの心がつく前に竹刀を握っていました」と神尾さんはいう。その神尾さんが、毛呂山中学校で外部指導員として剣道部を教え始めたのは、5年前。その当時、毛呂山中学校では剣道部の顧問を務めていた教員が異動し、指導者が不在だった。「それで、顧問をしていた先生から、中学生を教えてほしいと依頼があったのです。私で役に立てればと思ってお受けしました」。

大勢の中学生を相手に、竹刀を振るい始めた神尾さんだが、入部した生徒のなかには途中でやめてしまう子も少なくないという。たしかに、剣道部の練習は厳しい。寒い冬でも道場では裸足。重い防具をまとって、地道な基礎練習も欠かせない。

「だから、なるべく相手の名前を呼んだり、変化に気づくように心がけたりしています」と、多感な中学生を相手に、厳しい指導とともに、細やかな心遣いを見せる。

「子どもたちには、部活の時間や剣道を楽しんでいると思ってほしい」という神尾さん。「私も、楽しいからこそ今まで剣道を続けてこられたのです。厳しいと感じることはあるでしょうが、厳しいからこそ剣道は楽しいのです。厳しいければ厳しいほど、後から返ってくるものが大きいのですから」という。

仕事のかたわら、定期的に中学校の道場に通うのは大変なことだ。しかし、神尾さんは行くたびに、うれしいことがあるという。「中学生はとにかく成長が早いのです。私は、とにかく成長が早いのです。私は、1、2週間に1度しか指導に来られませんが、前回、言われたことを覚えていて、次に来たときに良くなっている。また、そのとき指導してもわからなかったことを、ほかの人の様子を見たり、真似をしたりして、自分でどんどん変化していく。そうした子どもたちが頑張っているところや、成長しているところを目の前で見られるのがうれしいのです」。

成長の喜びを語り、常に高みを目指す神尾さんの凛とした姿は、これからも剣道を通して中学生に多くのことを伝えていくことだろう。

毛呂山歴史教本

文化財シリーズ199
毛呂山の昔話 4

～狸の伝承～

今回は狐の伝承を紹介したので、次は狸の番です。狸は「むじな」とも呼ばれ、狐と同様に人を騙すことで知られています。町内の狸にまつわる伝承をご紹介します。

むじな憑き

隣の古老が昔、おしら講という隣の餅遊びで、餅を分けた帰り道、暗闇でむじなに襲われて憑かれたのか様子がおかしくなり、口もきかなくなりました。その後、むじなを引き出そうと古い師に頼み、護摩木を焚いて、その火のうえを裸足で家族や親戚など皆渡ったが、呪いをしていてため少しも熱く感じない。ところが最後にむじなに憑かれた本人を渡そうとすると、どうしても尻込みして渡らない。手を引いて無理やり渡そうとすると四つ這いになってまっしぐらに走ったそう。それでむじなも離れたという。(葛貫)

「油屋さん今晚は」

市場にある祖母(嘉永元年生れ)の実家に、夜な夜な狸が遊びに来た。古くから農業のかたわら、油搾りを営んでおり、広い作業場の土間に囲炉裏があった。夜中に作業をしていると、「油屋さん今晚は、油屋さん今晚は」といいながら障子を開けて一匹の大きな狸が入り込んできた。静かに囲炉裏の向こう側に回り、大あぐらをかいて暖を取っている。油搾りの作業を終えて後始末を始めると狸も静かに帰っていった。それが馴れて、たびたび囲炉裏に暖まりに来たそう。 (岩井)

狸にまつわる話は狐とは異なり、人なつこい雰囲気があります。家の者が留守をしている間に座敷に上がりこんで世間話をしているなどという話もあり、いたずら好きな性格もうかがえます。

しかし、いざ狸に憑かれたり、襲われた話は、狐以上に恐ろしく、巨大な青坊主になって襲ってきたという話も残されています。

狸は今もよく見かける動物ですが、今日では言い伝えのような恐ろしさよりも、哀愁のようなものを感じさせます。狸が昔のような愛らしくとも怖い存在である方が、自然な姿ではないかと思えてなりません。

出典『毛呂山民俗誌1』
毛呂山町教育委員会